

●特集 ソ連新時代への苦悩

新思考外交は変貌する！

「大統領制」を確立したゴルバチョフ。新生・ソ連が繰り出す外交戦略は九〇年代の国際情勢をどう変貌させるのか

新思考外交は変貌する！

中ソ和解の虚実この二年

中嶋嶺雄

ゴルバチョフソ連共産書記長が三〇年ぶりの関係改善のために北京を訪問し、「世紀のサミット」ともいうべき中ソ首脳会談が実現した昨一九八九年というのは、中ソ関係の歴史においてまさに画期的な転換点であった。加えて、きわめて象徴的なことは、こ

のゴルバチョフを迎えた中国内部に、これもまた中華人民共和国始まって以来の民主化運動の大デモンストレーションが起こったことである。顧みれば、過去三〇年に及ぶ中ソ対立の歴史の中でも、毛沢東死後の一九七六年以降は両国関係改善のステップが徐々

一九八七年以降、本格化したと考えられているゴルバチョフの新思考外交は、西側のみならず東側内での激変を招き寄せた。そして今、東欧のみならずソ連・クレムリン内において、時代を画する変化が起こり始めている。果たして新思考外交はどのような発展、あるいは変貌を遂げながら、世界に変化とそれへの対応を迫るのか。九〇年代国際問題のキー・ポイントになると思われるこの新思考外交の行方を七人の専門家に、多角的な方面から分析していただいた。

に刻まれてきていた。

まずブレジネフは、一九八〇年代初頭の「タシケント演説」によってソ連側からの積極的かつ一方的な中ソ和解への呼



一〇〇万の学生がゴルバチョフを迎えた

び掛けを行う。そしてこれを、銭其琛(現外相)をはじめとする中国側「知ソ派」のリーダーが積極的に受け止めることによって、中ソ関係は八〇年代半ばから急速に改善の方向へ向かうのである。

さらに一九八六年七月、ゴルバチョフは新思考外交を表明した「ウラジオストク演説」において、演説の大部分を中国に捧げている。中国がいかに偉大な隣国であり友邦であるか、そして社会主義の二つの大国はいかに手を携えなければならぬかということを積極的にアピールし、それを鄧小平はじめ中国首脳が前向きに受け止めたことで、昨年の和解へと至ったのである。

ところがこのゴルバチョフ、鄧小平両首脳にとって思わぬことに、とくに中国側にとってはまさに中ソ関係の改善という偉業を成し遂げたその瞬間に、学生たちが「鄧小平、お前は何者だ！」「鄧小平引き下がれ！」と騒ぎ始めたのである。民主化を求める学生側からすれば国

記)でもなく、首相(国務院総理)でもない鄧小平が超法規的存在としてゴルバチョフと会談すること自体に疑念をさしはさんだのであるが、ソ連との関係改善を引退の記念碑にと考えていた鄧小平にしてみれば、こうした形で学生たちから引退を迫られたのでは一歩も後へ引けない。革命第一世代として、また老幹部としての使命感から、学生たちの民主化要求運動がブルジョアの反革命「暴乱」であると一喝し、そして最終的には統制によって学生たちの要求を徹底的に弾圧するという天安門事件の引金を引いたのである。

こうしてみると、中ソ関係はきわめて重要な問題を残してしまっ、たと言えよう。ゴルバチョフにとっては、自らが新思考外交、あるいはペレストロイカの旗手として大歓迎を受けたわけであるから、内心学生たちには共感を覚えたはずである。それを弾圧する中国当局に対しては一線を画さざるをえないが、しかし

関係は維持していたい。この深刻なジレ

ンマは、例えば天安門事件直後に開かれた中国共産党十三期四中会で江沢民が総書記として選出された時、当時民主化抑圧に積極的な姿勢を示していた東ドイツのホーネッカーや北朝鮮の金日成が即座に祝電を打ったのに対し、ゴルバチョフは祝意を表するのに四日間を要したという事実からも窺われる。

こうした状況の中で昨年夏以降、天安門事件の悲劇を代償として、東欧諸国が内部から大きく崩壊していくのである。

私は九月初旬、東ドイツ、チェコスロバキアを訪れたが、そこでは中国民主化運動と天安門事件の影が実に大きく投影されていた。ある意味では東欧の指導者も、天安門の悲劇があったからこそ一滴の血も流さずに——ルーマニア以外は——政権交替と脱共産化、民主化を実現させることができたのではないだろうか。そしてこの東欧の動きとの関連において、ソ連は更なるベレストロイカを進めつつあるのである。二月初旬のソ連共

産党中央委員会において行われた、複数政党制への移行というゴルバチョフ提案は、ロシア革命七四年の歴史を覆す大転換だといえるだろう。

こうした社会主義諸国の変動の中で、中国はそれと真つ向から対峙する立場に陥ってしまい、しかも最近ではゴルバチョフに対する警戒さえ強め始めている。鄧小平は昨年一月、「ゴルバチョフが東欧の脱共産化の張本人であり、真のマルクス・レーニン主義にそむくものである」という批判を述べているが、こうした中国の対ソ批判は一九九〇年に入ると内部的には更に進展する。かつての「九評」（中ソ論争時に出された中国共産党による九つの対ソ批判基調論文）という古証文を持ち出して、現在のゴルバチョフ・ソ連を修正主義と批判する思想教育、理論教育を再び強化しているのである。

ただ問題は、こうした中国の対ソ批判が、かつてのように深刻な中ソ対立に転化するかどうかであるが、中国当局も三

新思考外交は変貌する！

進路を決める「敗北感」の功罪

秋野 豊

じた。ゴルバチョフのブレインを含む研究機関の人たちは、中国が民主化抑圧という態度をとったにもかかわらず、今後の中ソ関係に対して多大な期待をもっている。

昨年一月下旬、モスクワから北京へ向かう飛行機に乗った時、寒い深夜のフライトなので客席はがらがらではないかと思っていた私の予想に反して、小さなアエロフロートは満席であった。乗客はほとんどがソ連の科学者や技術者で、彼らは一様にはしゃぎ回っていた。一方、北京から東京に帰る飛行機は、大きく立派な日航機であるにもかかわらず、乗客がほとんどいないという状況であった。これはまさに今の中ソ関係、日中関係を象徴している現実のような気がする。私は、何となくあの五〇年代の中ソ友好関係を思い起こしたわけであり、中ソ関係が一方でこうした相互依存関係を深めつつあるということも、我々は認識しておく必要があるのではないかと思つた。（談・東京外国語大学教授）

九〇年代、欧州で変わっていくだろう地図というものに関して、重要な問題がいくつか考えられる。そのひとつがソ連版図の変化という問題であろう。

これまでのソ連の膨張主義的な動きというものは、基本的にはその核に「ロシアなるもの」があり、それに社会主義的イデオロギーとレーニン主義的な「党」という二つの道具が合体して、ロシア的なものを外に大きく張り出させていた。つまり社会主義的イデオロギーにしても、レーニン主義的な「党」にしても、これは国境を擦り抜けていく性格のものであり、国境を越えて団結すべき労働者のイデオロギー、あるいは労働者の組織そのものだったのである。

この二つの道具を持つことによって「ロシアなるもの」がヨーロッパに、そ

〇年の苦い教訓を噛みしめていたため、慎重な態度をとらざるをえない。また、ソ連・東欧における民主化・脱共産化を批判するということは、西側諸国との関係を潜在的にきわめて不安定なものにするうえ、「西側化」を警戒する立場の中国としては全面的に西側諸国に依拠するわけにもいかず、国際的に大きく孤立しつつあるから、それを避ける意味でも中国は、せつかく改善されたソ連との関係——外交関係、国家関係としての中ソ関係を台なしにすることはないであろう。

したがって一方では中ソの国境鉄道の建設とか国境貿易の再開、更には中ソ経済関係の拡大、中国労働者のシベリア投入、あるいは合併企業の設置というような既定の経済、貿易、実務関係は今後も活発化していくことであろう。

ソ連側は近い将来、江沢民総書記の訪ソを期待している。外交日程としては李鵬首相の訪ソということになっていくが、私が昨年にモスクワと北京を訪問した時も、ソ連側のそうした意向を強く感

して全世界に広がっていったということが、二〇世紀前半から後半にかけての動きであった。

しかし今、社会主義のイデオロギーもしくは社会主義のモデルというものは機能しなくなり、レーニン主義的な「党」というものも一党支配を続ける環境を失ってきている。つまり「ロシアなるもの」は今までその力を外に張り出してきた二つの道具を失ったのであり、それが東欧における「民主化」という意味を持って生まれてきたのである。

そして今、「東欧化現象」というものはソ連の版図内にまで入り込んできている。それがアゼルバイジャン、アルメニア、グルジア、そして何よりもバルトの民族分離独立運動なのである。

無論、すべての共和国がソ連から分離

経済往来

APRIL

ソ連新時代への苦悩

改革停滞を打破できるか！ <対談>鴨武彦/下斗米伸夫

「ゴルバチョフ失脚」後の世界 日高 義樹

沈みゆくソ連経済 大津 定美

新思考外交は変貌する！

秋野 豊/中嶋嶺雄/山内昌之/辺 真一/篠田雄次郎/

川島弘三/佐藤英夫

揺れるブッシュ政権の中国外交 宇佐美 滋

90年代 危機迫る石油事情

瀬木耿太郎/宮田 満/中村政雄

<新連載・日本経済一刀両断>

無知が招く「日米破綻」 小針 寛司

続・老記者の置土産⑱

マルクシズムの旗手たち

狂瀾怒濤の時代の戦士群像 大草実/萱原宏一/下村亮一

4月号

連載 スキな人 キライな奴 小島直記